

桂浜たより 最終号

桂浜を守り育てる会—桂浜水族館応援団— 会報



永國代表理事と秋澤館長と一緒に

ごあいさつ

明けましておめでとうございます。

コロナウイルスと闘い、ともに生きた4年間。

日々、進歩する医療技術と社会の発展により、私たちは新しい生活様式を確立し、人間史の一ページを刻んだ。

昨年は、桂浜公園の商業施設がリニューアルし、連続テレビ小説「らんまん」の影響もあって、浜辺は多くの人で賑わった。

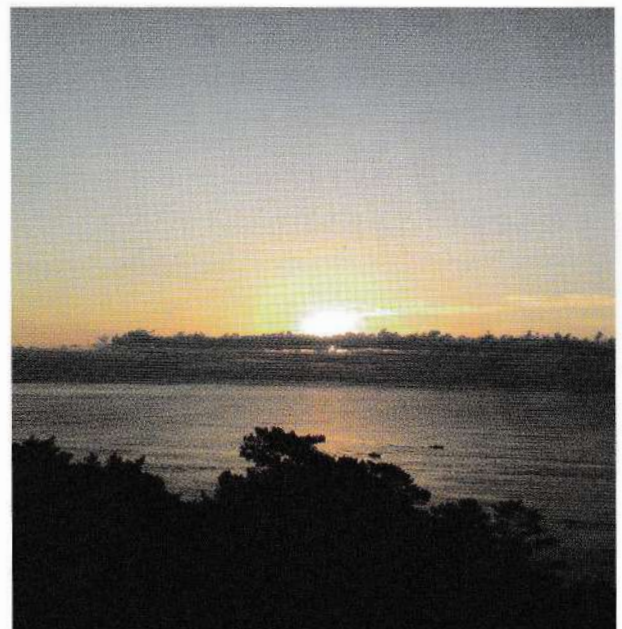
そうして、テレビ番組で「高知県」がよく取り上げられるようになったことで、芸能人が来高する機会が増え、おかげさまで、昨今、認知度とともに人気度が高まっている。

そんな高知の名勝「桂浜」の浜辺に建つ桂浜水族館も、今年で創業93年を迎える。

2024年は、どんな一年になるのだろうか。新しく彩られる景色がとても楽しみだ。

令和6年 元旦

公式マスコットキャラクター「おとどちゃん」



桂浜の日の出(水族館の屋上より)

ごあいさつ



桂浜を守り育てる会
代表 永國 雅彦

〈桂浜を守り育てる会（桂浜水族館応援団）を閉じるに当たって〉

会員の皆様 こんにちは。

日頃は大変お世話になっております。

このたび、桂浜を守り育てる会を解散することに相成りました。

新年早々このようなあいさつ文で誠に恐縮で、残念であります。お許しください。

会の目的である桂浜及び桂浜水族館の発展、活性化のめどがつき、一応の成果が得られたこと。

また、代表はじめ会員一様に高齢化が進み適当な後継者が見つかりにくいことが解散の理由です。

本会は、高校卒業後60年を経た同窓会の場合（桂浜荘）を借りて発足しました。2015年10月のことでした。

発起人は当時80歳近い老輩の同窓生たちで、「桂浜そして桂浜水族館をなんとか守り、発展させねばならない」というお題目に賛同を得て立ち上げたものです。

立ち上げ時の先導的な役割やその後の活動に、棚野正士君の情熱的な行動を忘れることができません。彼は心の底から桂浜を愛し、「桂浜周辺こそ知的財産の宝庫であり天然の素晴らしい地形、風物のもとより歴史、文化的な財産も豊富である」と常々語っていました。

「桂浜や浦戸湾は世界遺産に登録できるぞ！」なんて大豪語していたことを懐かしく感じます。故人になられてまだ1年少々ですが、天国で見守ってくれていることでしょう。

この場を借りてご冥福をお祈りします。

会員は土佐高31回生（S31年卒業）が主力メンバーで、土佐高OBや筆者の元勤務会社（関東地方）の同僚、そして地元ファン、知人、友人で構成されており、会員数は一時250名を超しましたが、高齢化の淘汰で解散時は200名を切っています。

会員の多くは年金生活者ですが、会費を丁重にも継続的に納入いただき誠に感謝感激の至りです。

本会の活動は、主に会報誌「桂浜たより」の発刊で、桂浜周辺の出来事や桂浜水族館の近況を紹介してまいりました。

また、桂浜観光やハマスイへのエール文の寄稿を、国会議員、県知事、市長はじめ関係有識者様からいただき、桂浜PRに花を添えました。厚くお礼申し上げます。

「桂浜たより」は、本最終号を含めて15号目になります。第5号から棚野正士さんより編集長を引き継いだ中田昌志さんも、2023年8月に急逝されました。（参考記事本号記載）

「森の中の高知駅」や「ガーナよさこい支援会」などのボランティア活動のかたわら、「桂浜たより」の編集に情熱的に携わり、その内容充実に尽くされました。

幅広い社会的知識の持ち主で、酒を飲みながらさまざまなことを真面目に教えてくださった姿がいつも目の前にちらつきます。

その他の活動としては、竜宮様の手摺補修、桂浜稲荷神社の改修、桂浜浜辺の休憩用いすの設置（寄付）、公園花一杯の会の展開、浦戸小学校へのイベント援助（寄付）などがあげられます。

よさこい（浦戸湾）観光、長宗我部観光、渚観光などまったく手を付けられなかったプロジェクトの夢は、継続して実現への道をあゆみたいと思っています。

機は熟し、令和4年度には長い検討期間を経て、やっと、遂に高知市による桂浜公園の整備計画が一段落しました。

民間による公園管理が始まったのです。管理者は（株）はりま家に決まりました。既存の土産店は全面撤退しましたが、設備は残して管理会社の手で全面改装し新しい海のテラスが誕生しました。

また、エリアマネジメント組織を結成し、高知市、管理会社はりま家、坂本龍馬記念館、桂浜水族館などによる桂浜魅力向上検討会も誕生しました。

さて、桂浜水族館の現状は幸いにも入館者は本会発足時（2015年）に比べ倍増の勢いです。

全国水族館人気投票（ねとらば調査隊実施）で2年連続ブッチギリの一位を獲得したのは想定外で、こそばゆい嬉しさに浸っています。

田舎の小さなおんぼろ水族館が、飼育スタッフの大量離職事件も手伝って行く末を危惧されたころを思えば、まさに隔世の感があり、うれしい驚きに浮き上がっているところです。

この大逆転の仕掛け人は、新館長と若い新入スタッフであり、若さと活気を共有して、おなじみの「なんか変わるで、桂浜水族館」のスローガンのもと、挑戦的な活動を実践し続けたことにあります。

SNSの利用、おとどちゃんの登場、イケメン飼育員の活動、小回りの利く“ふれあい体験”などがあげられます。

以上のことから、今こそ本会の解散の時期であるとの思いにいたりました。

桂浜も、ハマスイも、永遠であります！

小さな家族的な会でしたが、会員の皆様の温かいエールに包まれて幸せに過ごすことができました。

桂浜を守り育てる会の愛好者及び会員の皆様、本当にありがとうございました。

皆様の末永いご健勝をお祈り申し上げます。

追伸

本会の剰余金は会計報告に示すとおりです。剰余金の使途は桂浜水族館他に寄付することが役員会で承認されています。

本号（最終号）の製作費（印刷、編集、送料、事務費等）20万円を予算に入れ残金を水族館に寄付になります。


桂浜を守り育てる会会計報告（令和4年4月1日から令和5年8月31日）

収入の部		支出の部	
会費	436,890	桂浜たより 13号	121,000
		14号	137,280
利子	3	営業事務費用	
		桂浜たより送料 13.14号	36,686
		会費送料	20,238
		人件費	130,000
		(事務費編集費3名)	
		事務費	
		葉書他	6,894
		インク	28,660
		交通費	8,000
		記事掲載(高知新聞社)	5,703
		会議費	10,100
		(編集会議)	
		寄付金	
		桂浜稲荷神社	204,380
		浦戸小学校	100,000
	計 436,893		計 808,941
前期繰越金	823,952	次期繰越金(剰余金)	451,904
	合計 1260,845		合計 1260,845

上記の会計報告について、その正確性を調査の結果、適正であることを認めます。

令和5年9月9日
桂浜を守り育てる会

監事 和田 彪 

監事 竹内 銑郎 

桂浜の賑わい創出

景勝地・桂浜は、本市を代表する観光地であり、観光客や市民・県民の皆様幅広く愛されている観光地です。私自身、何度も桂浜に足を運び、太平洋の広大な景色や雄大に建つ坂本龍馬像を眺めるたびに、大きな活



太平洋を眺める龍馬

力を与えてもらい、本市の観光施策に取り組む大きな原動力となっております。高知市長として、これまで桂浜を守り受け継がれてこられた方々に敬意を表するとともに、これからも桂浜をより魅力あるものにしていけるよう取り組む所存でございます。

さて、現在桂浜は、大きな転換期を迎えています。

桂浜公園は、昭和50年代に整備が行われましたが、約半世紀近くを経て、施設の老朽化や多様化する観光ニーズに対応できなくなってきたことから、平成28年に策定した桂浜公園整備基本計画に基づき、順次、再整備を進めています。

令和3年度は、高知県の補助金を活用し、本浜の展望台付き休憩所をはじめ、バス待合所や観光案内所等の公共施設の整備を行いました。



本浜に新設した本浜休憩所

そして、令和4年度には、桂浜公園全体を包括的に管理運営する指定管理者を選定し、売店が立ち並ぶエントランスエリアの商業施設を「食べる」「買う」「学ぶ」「憩う」をテーマとした「桂浜 海のテラス」としてリニューアルしました。さらに、令和5年3月のグランドオープン後は、イベント「桂浜 海辺のバザール」や「桂

高知市長 桑名 龍吾



グランドオープンした「桂浜 海のテラス」

浜 太平洋SUMMER FESTA」、夜間には「中秋の名月 桂浜公園ライトアップ」や「桂浜 海のハロウィン」を開催するなど、ハード・ソフト両面で新たな賑わい創出に取り組んでいます。

さらに、これまで未開放エリアだった高知灯台に展望デッキの新設やカラー舗装等の整備を行い、新たな展望スポットとして、令和5年12月から一般開放を開始しました。今後は、高知灯台でのイベント実施等により、園内の周遊を促進していきたいと考えています。



一般開放を開始した高知灯台

最後になりますが、浦戸地区をはじめとする地域の皆様には、ゴールデンウィークの渋滞対策等にご理解いただき、また、公園内に立地する桂浜水族館や県立坂本龍馬記念館などをはじめとする関係団体の皆様にも、共同イベントやPR等、日頃から桂浜の魅力向上や観光振興に努めていただき、深く感謝申し上げます。

これからも桂浜に関わる全ての方にご協力をいただきながら桂浜の未来を築いていき、年間観光客入込数100万人の実現を目指して積極的に取り組んでまいりますので、今後とものご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

桂浜 一龍馬スピリッツと『志』を 再確認させてくれる場所一

一般社団法人 しあわせ推進会議
代表理事 会長 小川 雅弘

『桂浜』は、今では「龍馬に大接近」というイベントや全国にファンが多い「桂浜水族館」の人気で、これまで以上に観光名所としての魅力が高まり、多くの人を訪れる場所になっています。しかし、高知で生まれ育った



私が鮮明に思い出されるのは、そんな最近の『桂浜』とは一風変わった光景。それは、2015年11月15日に開催された坂本龍馬の生誕180年を記念したイベント『レッツゴー！ハンド

インハンド』の龍馬像ときらきらと輝く朝陽に照らされた桂浜とその青空です。

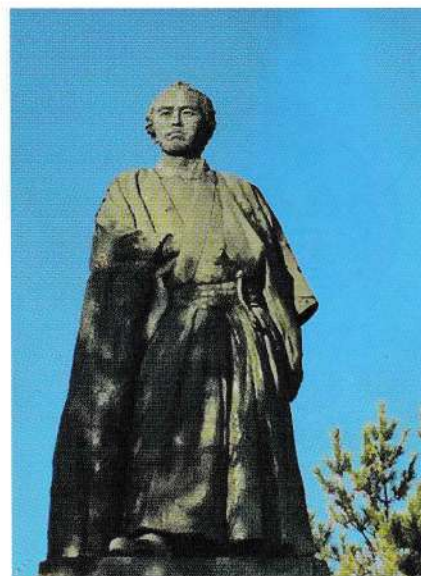
『レッツゴー！ハンドインハンド』とは、桂浜の坂本龍馬像から高知県立坂本龍馬記念館のシェイクハンド龍馬像まで、人と人が握手でつながり、心をつなごう！という企画。2015年のその日その場所には、スペシャルゲストとして、ソフトバンクグループの代表取締役の孫正義氏も東京からお越しになり参加をされましたが、実はこのイベントの仕掛人で責任者であり、誰よりもこの日を楽しみに待っていた人物、その当時の高知県立坂本龍馬記念館の館長、森健志郎氏の姿はその場所にはありませんでした。なぜなら、森氏は、イベントの始まる2週間前、突然この世を去ってしまったからです。

森氏と私とは個人的な付き合いが長く、年は離れていたものの、国と郷土の未来を憂う『愛国の志士』のような関係でした。私たちは『幕末混乱の時代に、私心

なく公に尽くし命懸けで「自由・平等・平和」な社会を目指した坂本龍馬の精神に則り、命を大切にする戦争なき平和世界の実現を目標に、幕末にも似た平成の現在を『龍馬スピリッツ』で果敢に乗り切る力を備えた人材を育て、諸外国との相互理解と友好親善及び国際感覚ゆたかな国づくり、人づくりに寄与する』ことを志に立て、2013年に『坂本龍馬人づくり財団』を一緒に設立したほどです。そして、これからの日本を担う『龍馬スピリッツ』をもつ若者を育成する財団の事業を孫正義氏にお願いし、その趣旨に賛同して応援してもらおう！という大事な時に、森氏は旅立っていられました。それは奇しくも、志半ばでこの世を去った坂本龍馬と同じような境遇でした。

しかし、森氏が多くの人に訴えていた『龍馬スピリッツ』は、不滅です。

『桂浜』が、坂本龍馬像がある限り、この場所に訪れた人々の心の中へ『龍馬スピリッツ』は受け継がれ、生き続けていきます。



毎年、多くの方々が高知を、そして桂浜を訪れています。龍馬像を見上げ、龍馬記念館に足を運び、龍馬のように広大無辺の水平線が広がる太平洋を眺めて、私心を超えて『志』を『龍馬スピリッツ』を確認しにやってきます。イスラエルの紛争、ウクライナの侵略、パンデミックの危機、気候変動や天変地異など、人類が直面して

いる問題を乗り越えるためには、今、まさに坂本龍馬が抱いた清い『志』と『龍馬スピリッツ』が求められている時代と社会になっているのではないのでしょうか？

司馬遼太郎も『志をもて』たとえ中道で斃れようとも、志を持つことがいかに素晴らしいかを、あなたは、世界中の若者に、ここにたちつづけることによって、無言で諭し続けているのです。」と語っています。

そして、司馬遼太郎は、「最後にささやかなことを祈ります。この場所のことです。あなたを取り巻く桂浜の松も、松をわたる松籟の音あるいは岸打つ波の音も、人類とともに永遠でありますことを」と締めくくっています。

だから、『桂浜』という場所は、いつまでも美しく、清く、清廉で、誰にとっても『志』と『龍馬スピリッツ』を再確認させてくれるためにあり続ける場所なのです。



2015年11月15日 坂本龍馬生誕180年の桂浜にて

変な水族館

子どもの頃から水族館が大好きで、旅行や出張の際に時間があれば各地の水族館を訪問している。モンレーベイ水族館やシンガポールのシーアクアリウム、国内では美ら海水族館、名古屋港水族館などが好きな水族館だ。どこもお金がかかって大規模で立派だ。

一方、個性的で『変な水族館』も国内に多数ある。山形の鶴岡市立加茂水族館はクラゲばかり、長崎ペンギン水族館はペンギンパラダイス、他にも深海魚、サメばかりに特化した水族館もある。そのヘンテコな中でも筆頭最右翼が我が『桂浜水族館』であることは間違いない。

この文書を“おとどちゃん”いや違う!“変な館長”の秋



学校法人龍馬学園
理事長 佐竹 新市

澤さんに依頼され、改めて娘と訪れてみた。改めて極めて変な水族館だと確信した。朝ドラ「らんまん」の放送終了間もない週末ということもあり、桂浜公園は観光客でごった返していた。全面リニューアル開業した「海のテラス」のレストランには行列ができ、龍馬像や本浜、そして水族館にも人が溢れていた。

さっそく水族館に入場すると館内案内の大きいボードがあるが、変な説明文字だらけ。そして園内随所に手作り感満載の変な説明のボードがそこら中に溢れ、いちいちそのヘタウマボードを読んでいるとなかなか先へ進めない。

土佐弁丸出しで、「手を出したらこわいちゃ。こじやんといたいぜよ」などと変なペンギンの絵と共にお世辞

にもうまかない文字で描いてあったりする。鯨などの骨格を集めたホネホネルームでは、なぜか骨格の顎が光りながらパクパク動いている。とにかく遊び心満載で何より愛に満ち溢れていて最高なのである。

イルカもいなくなりショータイムも廃止したが、それよりオモロい“変な飼育スタッフ”が園内随所において、動物と戯れて(トレーニングをして)いた。中にはお客さんとエラク盛り上がり会話をするスタッフもいた。SNSフォロワー25万人超も納得だ。

長女も変な説明ボードに大ウケし、ウミガメ、とど、ペンギン、カピバラまで一通り“ごはん”をあげて、最後に

Dr.フィッシュに両腕の角質を奪われ、終始大笑いで水族館を後にした。

私は現在土佐経済同友会の代表幹事を務めているが秋澤園長も会員で、経済界のメンバーと積極的に交流し『変な水族館』の布教活動に余念が無い。

高知を代表する観光スポット桂浜にとって、この桂浜水族館はなくてはならないキーパーツの一つである。愛あふれる秋澤園長のリーダーシップのもと、さらに磨きを掛け「日本一変なハマスイ」が未来に向かい更に円熟進化することを心から期待している。

桂浜遠望～過去現在未来へと



元・高知県立坂本龍馬記念館
学芸課長 前田 由紀枝

手元にある古いアルバムには、桂浜で撮った写真がたくさん貼られている。

竜王岬の祠へ続く階段で、父のレンズに収まった若い母は、ほっそりと美しい。まだ母親になっていない頃のものだ。

スモック姿の園児たちが砂浜に並んだ遠足風景。家族とお弁当を食べる幼い私は海を見ている。

桂浜を囲む岩場の下にある水族館では、プールのような水槽にいるウミガメは怖いくらい大きかった。ウミガメは子どもだった私に海の神秘を語ってくれた。波打ち際で何度遊んだことだろう。

海に面した花海道や浦戸大橋からのルートのない時代、桂浜へ行くには、浦戸旧道の小さなトンネルをくぐり、民家の並ぶ狭い路地を進むしかなかった。そこを過ぎると、桂浜に人があふれ、五色石をはじめとする土産品が並ぶ店々に活気があった。

小学生の頃、中央の大きな階段を上った辺りにサザエの壺焼きの屋台が並んでいた。熱々の貝のおいしさは家族の語り草で、亡くなる間際、病床の父はあのサ

ザエを皆に食べさせたいとつぶやいていた。

桂浜の思い出は限りなく、多くの物語をたぐり寄せることができる。

それもそのはず。私は桂浜の丘上にある高知県立坂本龍馬記念館に勤めることになったのである。高知県沿岸のど真ん中にある、小さな半島に20年近く通い続けた。

モノクロや淡いカラー写真だった桂浜の風景に、鮮やかな色彩が宿った。ただ見上げていた桂浜の坂本龍馬像は家族のように近いものとなった。

海援隊長だった坂本龍馬(1835～67)という男は、今から160年近く前にいなくなったにもかかわらず、永遠の命を持つ銅像として桂浜の台地に100年近く立ち続けている。

弓なりの砂浜。果てしない太平洋。風雨や照りつける陽射しの厳しさを受け入れて、太陽、月、星、人々とともに龍馬は桂浜にいる。波音、アシカたちの声を聴きながら。

あるときは生きづらくなった若者を戒め、人生に疲れ

た人を慰めた。夢を語る人に寄り添い、勇気を与えた。それは銅像の裏側に「建設者 高知県青年」とのみ刻んだ、銅像建立に尽力した一世紀前の若者たちも同じであったろう。

最後の大阪高知特急フェリーに乗って来た人は、海から龍馬像に最後の挨拶をするために来たと言っていた。桂浜の記憶は多くの人の中で、様々な思い出へと醸

造されてきた。

桂浜の風景は、木々の成長や整備事業で少しずつ、しかし確実に変わっている。歴史は新しくなることで古くなっていく。

龍馬とともにあった私の歳月は、20年を超えてもその歩みを止めない。桂浜で過ごした時間が私の中で消えることはないからである。

私の小さなテーマパーク「桂浜水族館」



高知信用金庫
理事長 山崎 久留美

桂浜の隣りまち“浦戸”で育った私は、物心ついた頃から「桂浜水族館」が特別の場所であった。

浦戸の前には、土佐湾に面して、土佐市宇佐から桂浜まで続く長い長い浜がある。現在は、テトラポットの設置で砂浜が侵食されて少し寂しくなったが、当時は、私たちジモトの子どもの遊び場であり、ドッジボールやかけっこに凧揚げ、海に向かって石投げ、安全で誰気かねなく遊べる天国で、みんなで集まれば、桂浜に向かい浜づたいに冒険の旅にも出た。

なぜ桂浜が、私たちジモトっ子の冒険対象となったかといえば、高度成長に沸く日本は空前の観光ブームで、桂浜にも驚くほどの観光客が訪れた。

浜に沿って歩いてゆくと、龍王岬が見えてくる。それを越えると、テレビでも見ているかのような観光客。カメラを首に下げたお父さんと楽しそうな家族、会社の慰安旅行のようなオジさんの集団、新婚旅行のようなきれいな服のカップル。木彫りの土佐犬や龍馬の銅像、ペナントや五色石あめ・かつおつぶなど、お土産ものは飛ぶように売れ、桂浜は普通の暮らしとは別世界のテーマパーク。桂浜水族館は、燦然と輝く私のシンデレラ城だった。

桂浜を散策し、観光気分を味わい、桂浜水族館を外から覗き、夕焼けに龍王岬のシルエットが浮かぶまでみんなで遊んだ。

憧れの桂浜水族館に入場できるのは、遠足か家族におねだりした時だけであったが、夏が来ると、水族館内のプールがなぜか人間に開放され、そこに泳ぎに行くことが子ども心にも至福の時間であった。

時が経ち、桂浜水族館は「ハマスイ」と呼ばれ、全国水族館人気ランキングでもぶっちぎりの1位を獲得したと聞いた。おとどちゃんも気になる。

県外からの来客と、久しぶりの桂浜、ハマスイにも伺った。あかめをライトで照らし、カメ・アシカ・カピバラ、全てに餌をやった。水槽に表示された調理方法を見ていると、次の魚の食べ方ばかりが頭に浮かび、全員でどれがウマイか議論ばかりになった。ペンギン一羽一羽につけられたシブイ名前も絶妙で愛らしい。

そうか、このエンタメの力こそが、ハマスイの人気の源であるのだ。館長・飼育員の皆様のウイットに富んだアイデアと細やかな努力が、人々の心に刺さっている。

海のまちテラスも美しく整備され、ハマスイも楽しさ倍増、龍馬人気も健在で、桂浜には、再び観光ブームが訪れている。

全国の皆さん、インパウンドの皆さん、桂浜の小さくても日本唯一のハマスイ、桂浜水族館にこれからも注目してください。

私も懐かしい桂浜水族館を心から応援しています。

中田昌志君を偲ぶ

土佐高校昭和35年卒同期生
公文 敏雄

故中田昌志君のご遺族から喪中はがきが届きました。あるじの居ないお正月はいかにと思いやりながら、しみじみ眺めております。

あれは猛暑の8月下旬、中田君が20年以上にわたり力を注いでこられた「ガーナよさこい交流」活動の最中でした。ガーナから来日の高校生一行20名を率いて「原宿スーパーよさこい2023」での演舞を終え、次の交流訪問地福島県猪苗代町にバスで移動した日の夜中、宿の自室で寝だままま帰らぬ人となりました。退職後の人生を、世のため他のため、ボランティア活動一筋に生きた中田君の、いのちを尽くし切ったかのような穏やかな最期でした。

中田君が母校の同期生に呼び掛けて創始した日本・ガーナ高校生交流事業は、2003年夏の高知市訪問が皮切りです。以来3年ごと延べ7回におよぶガーナ高校生来高のたび、彼は一行を桂浜に案内しました(写真)。「桂浜を守り育てる会」を応援し、後年「桂浜たより」編集長を引き受けられたこととともに、桂浜に対す

る並々ならぬ愛着がしのばれます。

郷土をこよなく愛した中田君は、高知城の観光ボランティアガイド、犯罪被害者支援の会などにも関わられたほか、みずから立ち上げた「森の中の高知駅」のリーダーとして、仲間たちとともに駅前に花や木を植え、夏も冬も一所懸命水をやって育てていました。

とさでん高知駅電停の脇では、早春に植えたばかりの希少種「仙台屋桜」の若木が元気に枝を伸ばしています。「連続テレビ小説『らんまん』放送の記念に牧野富太郎博士ゆかりのサクラを植えよう!」という中田君の提唱に、支援の輪が広がって実を結んだもので、彼にとって最後の植樹仕事となりました。電車を待つ合間にも、ホームの先にちょっと歩を進めて、彼の形見ともいえる山桜を見つけてください。

東京住まいの筆者は、毎月帰省の都度中田君と活動を共にしました。時折、居酒屋の暖簾をくぐったのも懐かしい思い出です。二人が通った「磯の茶屋」は、名物女将が先だって亡くなり、店も姿を消しました。中田君よ、いつかそちらに行ったら、「酒は桂月、肴はカツオ」、女将の前で大いに昔語りをしましょう。

挽歌

つれづれの夕べは土佐の酒酌みて

夢語りたる^{とも}朋友忘るまじ

(平成5年12月)



2016年9月、ガーナ高校生と土佐高生を引率して桂浜水族館を見学(前列左端帽子姿が中田昌志氏、その右は永國館長=当時、「桂浜たより」第2号に中田氏執筆の関連記事)

美人?館長のモノローグ

とある協会に「日本一美人の館長がいる水族館」だと紹介してもらったところエビデンスがないと却下され、よってこのタイトルの「美人?館長」というのも変更しようと思う。と前号で書いた記憶がまだ新しい中、桂浜たよりが廃刊になると知った。これは最後まで美人館長を貫かねば。

廃刊となると寂しいものである。物を書くということが減ってしまうことが意外にも寂しいことを知った。重ねて、編集長である中田氏が永眠した。知った顔がひとり、またひとりとお空へ還ってしまう。いつだったか、中田氏と永國代表理事が追手筋をふたりで仲良く歩く姿を見たことがある。ほろ酔いのふたりが楽しそうに千鳥足で絡みながら若い衆に負けずとキャッキョッしていた姿が最後になろうとは思わなかった。彼らは、土佐高等学校の先輩後輩。ふたりがいる空間はいつも楽しそうに話に花が咲いていた。そのおかげか、ずいぶん代表理事も若返り元気で毎日を謳歌していたように思う。そんな伽が一足早くお空へ逝ってしまい少しだけ寂しげな背中が気になる。伽が旅立ったこともあり、この桂浜たよりが廃刊となってしまうのもまた寂しいもので。

しかし、桂浜たよりが発行されたこの歴史は皆の心の中に残り、それぞれの思い出となり、続いていくだろう。そうであってほしいと願っている。

ハマスイもアフターコロナで多くのお客様が戻って来た。平日の貸切状態やスタッフの人数の方が多くなり、うれしい半面戸惑っている自分があるのが滑稽である。ゆるゆるとした流れのコロナ禍に慣れてしまった頭と体は、修復せねばと焦りをみせ、毎日イライラと沸々というマイナスを生み出してくるようになった。大半のスタッフはコロナ以前の働き方や時間配分を経験していないがためにわからないことも多い。それに私のマイナス部分が衝突してしまう現象が続いている。まさに2014年からの改革時と同じ現象が少なからず起きているのだ。メディアを通して、またSNSで持てはやされたハマスイこたちは、本来の水族館、博物館の役割を担うにはまだまだ学びが必要なことも多い。

周りでは薄っぺらい知識と自信だけだといわれるこ

桂浜水族館館長
秋澤 志名



ともあるのだが、館長としてはまたそれはそれでよしだと思っている。これからハマスイこたちは、自分らで学び、自分らのカラーを生みだし輝いていく。そう「信じる」ことが館長としての私の仕事というか信念である。「信じる」ことができたから今があるのだから、これからのあるのだ。伸びしろしかないハマスイこたちを応援していただければ幸いだ。そして、まだまだ未熟な館長を叱咤激励願いたい。

桂浜も徐々に変化を成し、いろんな取り組みが行われるようになった。今まで置き去りにになっていた「思い」が現実化してきた。長年願っていた高知灯台の観光化。素敵で歴史もある灯台が桂浜にあることを知ってもらいたいとずっと言い続け2023年やっとできた。浜辺のイベントについてもハロウィンには月夜の下、ランタンを浜辺で上げた。まだまだ課題の多い桂浜ではあるが今後の展開は期待しかない。民間力を発揮し、大いに高知、桂浜の観光に寄与していきたいと思う。

ハマスイは「なんか変わるで!桂浜水族館」をスローガンとし、変わり続け、皆の記憶に残る「おらんくの水族館」になるべく今日も走る。スタッフが楽しく働き、お客様に楽しんでもらえる環境を今後も続け、空上からも応援してもらいながら変化をし続けるであろう。



編集後記

桂浜たよりの編集長である「中田昌志」氏が逝去し、本誌の刊行も最後となった。永國代表理事に頼まれ、写真提供や編集といった作業で私も制作に何度か携わったが、こんなにも早く最終号を迎えるとは思ってもしなかった。

いつだったか、中田さんは私に、持っていたタブレットを自慢げに見せてきたことがあった。宝物を見せびらかすようにあまりにも嬉々とするものだから、その日から私はひそかに彼を「タブレットおじさん」と呼んでいた。

そんな中田さんの早すぎる死——。あんなにも生命力に溢れる目をしていただけなのに、こんなにもあっさりと天国にいらしてしまうだなんて、信じられない。どうせまた大きなリュックを背負ってお気に入りのタブレットを自慢してくる。天国には、散歩にいっただけだ。

今回、最終号ということで、高知を代表するさまざまな方にお声がけし、寄稿をお願いした。

それぞれの方には、桂浜の思い出やこれからに期待することをテーマに綴っていただいている。

私がこの水族館に入社して今年で8年。

過去に起きた事件や事故によって背負った負のイメージを払拭すべく、「なんか変わるで」をスローガンに企業改革を進める中で、「桂浜水族館」はいろいろな意味で変わった。

館長が変わり、スタッフが変わり、めざす場所が変わり、海路が変わった。SNSを駆使し、「人」にスポットを当てた独自のスタンスを確立すると、次第にファンが変わった。公式マスコットキャラクターの「おとどちゃん」が発信するX (旧Twitter) の歯に衣着せぬもの言いは今なお賛否両論あるが、お笑い芸人やアーティスト、声優や俳優など、さまざまな分野で活躍する人たちの目に留まり、日ごとに注目を集めている。

経営の立て直しを本格化した桂浜水族館は、七代目肝っ玉館長を筆頭に苦難を乗り越え、飛ぶ鳥を落とす勢いをそのままに、水族館の枠にとらわれない戦略で次々と変革を起こしてきた。

そうして、年間来館者数15万人を目標に掲げ、駆け抜けようとしていた矢先、時代は変わり、未知の感染症「コロナウイルス」と闘う日々が始まった。

「死」の恐怖と隣り合わせの世界で、いくつもの尊

いいのちが失われ、私たちは深い悲しみに暮れた。

4年の月日が流れ、ウィズコロナからアフターコロナへ。

戦後初の長期休館も気丈に乗り越え、桂浜水族館は、今日も「人」にスポットを当てた発信を続けている。

「水族館なんだから、「人」ではなく「魚」を見せろ」

はじめこそ否定的な意見が多かったこのスタンスは、「人」と「人」が距離をとる時代に突入してもなお貫いたからこそ多くの人の心を癒やしている。

「コロナ禍で、家でひとり心が荒んでいく中で、桂浜水族館の飼育員さんに生きる希望をもらいました」

「コロナのせいで、いろんなことを我慢して、ひとりで塞ぎ込んでいた時に会ったのが桂浜水族館でした。飼育員さんが生きものに向ける優しい表情や笑顔が、「大丈夫」って言ってくれてるみたいで、すごく救われました」

どんな時も、「人」には「人」が必要だ。どんな形でもいい、誰も独りになってはいけない。人は、一人では生きていけないのだから。

人生、山あり谷あり賛否あり。一時は、「高知の恥」とまでいわれていたこの水族館は、いつしか「高知の誇り」といわれるようになった。

しかし、どこか「変」なのは相変わらずなようで。まあその変な水族館に人々は心癒やされるというのだから、こういう水族館があったって別にかまわないだろう。

2024年も、桂浜水族館は愛変わらずです。

編集担当(広報主任)

森 香央理



桂浜たより 最終号

2024年1月発行(年2回1月8月発行) ♡森の中の高知駅♡ HP <http://mori-kochi-eki.jimdo.com/>(バックナンバー掲載)
発行/桂浜を守り育てる会(桂浜水族館応援団) 公益社団法人 桂浜水族館内
Tel/088-841-2137 Fax/088-841-2451 編集・印刷/(株)高知新聞総合印刷